ISBN 978-4-903875-24-8
Contribution to the Studies of Eurasian Languages (*CSEL*) Series 21
ユーラシア諸言語の動態　III　－言語の多様性と類型と混成言語－
ユーラシア言語研究コンソーシアム 2019 年 12 月発行
Dynamics in Eurasian Languages III: ―*Diversity, Typology and Mixed language*―
Kobe City College of Nursing / Consortium for the Studies of Eurasian Languages
(December 31, 2019), pp. 215-230.

研究ノート：P. F. ポリャージン『ヤクート語ロシア語辞書』（1877 年）より「序」（和訳）、「使用の手引き最重要事項」（原文テキストと和訳）

[Note] From the Yakut-Russian Dictionary compiled by P. F. Porjadin in 1877: “Preface” (Japanese translation) and “Guidance for users on some of the most important points” (text and Japanese translation))

藤代　　節
FUJISHIRO, Setsu
（神戸市看護大学 Kobe City College of Nursing）

研究ノート：P. F. ポリャージン『ヤクート語ロシア語辞書』（1877 年）より「序」（和訳）、「使用の手引き最重要事項」（原文テキストと和訳）

藤代　節
setsu@tr.kobe-ccn.ac.jp

キーワード：Порядин, П. Ф.　ヤクート語ロシア語辞書　帝室ロシア地理学協会

0. ポリャージン P.F.著『ヤクート語ロシア語辞書』編纂の背景

北方のチュルク語、ヤクート語（サハ語）は、ロシア語を除けば、シベリアで使用されている言語の中では、文語を持つ言語として比較的長い歴史がある。北方の少数民族言語は、その大半が 1920 年代以降のソビエト政権時代に文字が作成されたに過ぎず、それら文字表記が整った後も多くの場合、文語を発展させる段階に進むには至らなかったと言わざるを得ない。そのような中で、シベリア地域において広域でロシア語の次に有力言語であったヤクート語には、必ずしも一般に流布したとは言えないまでも、既に 19 世紀からロシア語文字に基盤をおいた表記法が考案されていた。ヨーロッパロシア側からの民族学、言語学研究者あるいはロシア正教布教の使命を帯びた宣教師等により、ヤクート語の文字表記が行われ、19 世紀から 20 世紀初頭にかけてロシア正教関連翻訳書籍、口承文芸の記録、その他、ヤクート語による少なからぬ文献が残されている。また、これらの動きの中で、1851 年の O.ベートリング Бётлингк, Отто Николаевич (1815-1904)の *Über die Sprache der Jakuten* («*О языке якутов*»)『ヤクート人の言語について』、1858 年の聖職者 D.ヒートロフ Хитров, Дмитрий Васильевич (1818-1896)による『ヤクート語文法概要』«*Краткая грамматика якутского языка*»など、ヤクート語そのものについての文献も出版されていた。特に流刑囚であった E.K.ペカルスキー Пекарский, Эдуард Карлович (1858-1934)の編纂による『ヤクート語辞書』（*Словарь якутского языка*, 約 25000 語）が 1898 年の試作版に続き、1907 年から 1930 年にわたり順次出版され、現在に至るまでヤクート語研究の基盤と

なる辞書としての価値を保っている。この辞書の編纂にはロシア帝都であったサンクトペテルブルグの東洋学者ら、即ち、V.V.ラドロフ Радлов, Василий Васильевич (1837-1918)や B.Ja.ウラジミルツォフ Владимирцов, Борис Яковлевич (1884-1931)、K.G.ザレマン Залеман, Карл Германович (1849-1916)、A.N.サモイロビッチ Самойлович, Александр Николаевич (1880-1938)などがおおいに協力したことが知られている[1]。

ヤクート語には、これら一連のヨーロッパロシアからの学術的アプローチがある一方で、1917 年には、ヤクート人言語学者 S.A.ノブゴロドフ Новгородов, Семён Андреевич (1892-1924)が作成した国際音声字母に基づくヤクート語表記法を採用し、ノブゴロドフの初等読本 *Suruk Bichik* «*Сахалыы сурук-бичик*» (1921-23)によりこの表記法の実用化を促進するなど、ヤクート語母語話者による文語形成への動きもあった。

更に注目すべきことに実はヤクート語には、既に 1877 年にヤクート語母語話者 P.F.ポリャージン Порядин, Прокофий Филиппович[2] (1838-1884)による 8000 弱の語彙を収めた『ヤクート語ロシア語辞書 *Якутско-русскій словарь*』が編纂されていたのである。この未出版の辞書がロシア地理学協会古文書部に保管されていることを 2013 年に北東連邦大学 Северо-Восточный федеральный университет имени М.К. Аммосова (旧国立ヤクート大学)オロンホ研究所 Научно-исследовательский институт олонхо の A.V.ミガルキン教授 Мигалкин, Афанасий Васильевич が地理学協会古文書部の M.F.マトベエワ(Матвеева, Мария Федоровна)主任の協力を得て見つけ出し、著者ポリャージンの一族や辞書成立の背景と辞書の内容、さらに当時出版されないままではありながらもペカルスキーの辞書編纂に非常に有効に活用された様子などを関係者の書簡などを通して記述している。本稿では、P.F.ポリャージンが編纂し、未出版のまま残されている辞書について Мигалкин(2013)を参照しながら紹介する。

１. Мигалкин (2013) よりプロコピー・フィリポビッチ・ポリャージン (1838-1884) とその辞書について

1877 年に完成されたポリャージンの辞書について、Мигалкин (2013)は、Попов Г.В. (Первые интеллигенты, *Мегино-кангаласский улус*, 2001)や Оконешников Е.И (*Э.К. Пекарский как лексикограф*, 1982)の記述から、ペカルス

[1] 1958 年リプリント版 *Словарь якутского языка* (1907-1930)の序の記述より。

[2] Мигалкин(2013)では、ポリャージンの名を Прокопий としているが、本稿で取り上げる文書中では、ポリャージンは自署として Прокофий を使用しており、Филлиповъ を父称として記している。

キーもこれをおおいに利用し、ペカルスキーの辞書の 2500 箇所に、ポリャージンの辞書への参照箇所 Пор.がマークされていることを示している。

ポリャージンは、ヤクーチヤの中央部に位置するメギノ・カンガラスク地区(Мегино-Кангаласский улус)の一族出身である。P.F.ポリャージンは、義賊マンチャールィ(Манчаары)と親しかったという父フィリップ・ポリャージンが建築家として活躍していたヤクーツク市でその長男として 1838 年に生まれた。カザン、一説にはイルクーツクで医学を学び、ヤクーチヤ中央部のビリュイ地方などで医療に携わっていたという。その後、1884 年にサンクトペテルブルグに出て、辞書を完成させた。P.F.ポリャージンの出身一族とその生涯については、Мигалкин(2013)に詳述されている。

辞書の編纂過程について詳細は不明であるが、現在、サンクトペテルブルグ市のロシア地理学協会 (Русское географическое общество, Штаб-квартира РГО в Санкт-Петербурге)古文書部(научный архив)に Разряд 64, Опись 1 номер 35（第 64 類目録 1 登録番号 35）として登録・所蔵されており、その手稿本は出版所に提出するばかりに整えられていたことをうかがわせる。出版されていれば、最初のヤクート語辞書として扱われるべきものとなったであろう。

この 1877 年に完成され、著者本人により帝室ロシア地理学協会(当時)に出版要請のために送付された『ヤクート語-ロシア語辞書』が現在の登録番号下にある一冊と同様の体裁であったとすると、総ページ数は 394 ページであり、900 余語から成る 7 ページにわたる「序 Предисловїе[3]」が付されている。また、これに続いて、9 ページにわたる「使用の手引き最重要事項 Необходимѣйшія изъясненія къ Употребленію Якутско-русскаго словаря」(以下、手引き)が掲げられている。辞書部分には、ロシア語アルファベットに準じて А, Б, Г, Д, ДЖ[4], Е, Ё, И, (İ), К, Л, М, Н, О, П, Р, С, Т, У, Х, Ч, Ы, Э, Ӭ, Ю, Ю̆, Я, 及び Ъ, Ь の配列で 7900 余の語彙が見出し語として掲げられている。現在は、A4 版程度のサイズで綴じられ製本された状態（冊子体）で保管されている。「ページ番号」としては各ページ上部中央に付された数字が読み取れるものの、本編の始まる 21 ページ目以降は、これら数字に取り消し線が施されている。一方、冊子を見開きの状態にした右側上部に当該見開きの 2 ページ相当分に対して順に番号「見開き番号」が振られている[5]。アルファベット順に掲げられた辞書本編末には、16 ページ（[189　p.379]

---

[3] ポリャージンの原稿では、予測される i ではなく ï が記されている。

[4] 記載されている文字形は、ДЖ にやや近い。ここでは、ДЖ と印字する。

[5] この見開き番号は、中とじのタイトルページを含む見開き分を 1 とカウントし順次、振られている。現在、製本された状態の全編にわたり、各ページ上部中央に振られている番号は、ポリャージンの付したものと思われ、「序」等の本文記載に用いたのと同じものと推測される青みがかったインクで記入されている。辞書本編とは異なり、「序」と「手引き」のページ番号には、取り消し線は施されていない。「序」は見開き番号 2 の右ページの番号 5 から

～[(197)　p.394]）にわたり「辞書本編から抜粋各種テーマ別簡略語彙」Краткое извлечение изъ Якутско-Рускаго словаря разныхъ собственныхъ названий.-が続く。

この辞書には、２通の手紙が付されており、１通は、辞書の編纂を終えたポリャージン自身からの書状である。ポリャージンは 1877 年 4 月 22 日に帝室ロシア地理学協会会長に宛てて、完成した辞書を送付し、出版を依頼している[6]。もう１通は、ポリャージンの死後、1900 年 11 月 27 日付けの書状で、辞書を返却する旨が書かれている事務的な書簡である[7]。これら書状についても Мигалкин

見開き番号 5 の右ページの番号 p.11 に記載され、見開き番号 6 の右ページ番号 p.13 から見開き番号 10 の左ページ番号 p.20 ページまでが「手引き」である。本稿では、これらを[2 (p.5)]、[5　p.11]、[6　p.13]、[10　p.20]などと表したい。( )は、カウントされてはいるが、番号数字は表記されていないことを表す。なお、ポリャージンは、全体の表紙（*Якутско-русскій словарь* ヤクート語ロシア語辞書）を p.1 としたのであろう。標題の入ったページ[1 (p.3)]を中表紙とし、 [10　(p.21)]から本文が始まる。見開き番号や本文記載の黒インクで施されたページ番号の取り消し線がいつどのような経緯で施されたのかは不明である。

[6] ポリャージンの辞書に付されている彼自身が発信した書状は以下のような内容で地理学協会古文書部（Разряд 64, опись 1, но.35 に添付）に保管され、紙面右上に帝室地理学協会古文書部(АРХИВЪ ИМПЕРАТ. Русскаго Географичѣск. общества)の印があり、その下にБ. IX. 35 に添付(Къ Б. IX. 35)と書き添えられている。

「帝室地理学協会会長レオニード・ニコラエビッチ殿
この度、貴殿に委託された貴部署の所有となるものとして拙著、簡略学術実践ヤクート語ロシア語辞書の原稿をお届けすることになり大変光栄に思います；印刷の暁には 1200 部をいただければ幸いです；紙代、刷り費、製本にかかる経費については、詳細な請求書が届き次第、ヤクーツクより支払いをいたします。
辞書の印刷に際し、校正作業は外科アカデミーの医学生、エゴール・ニコラエビッチ・スレプツォフとヤクート人のイノケンチイ・トロフィモフが行うことになるでしょう。
もしも拙著の辞書が貴部署で印刷されないことになりましたら、その旨をヴィボルクス区フィンリャンスキー街 8 番地に住まう官吏アレクセイ・マトベエビッチ・パセリッツを通して、私にお知らせいただけましたら幸甚に思います。
なお、私は協会の民族学部門の一員となりましたので、今後、ヤクート地方においてその土地とそこに住む諸民族についての民族学的、文化人類学的、統計学的研究を、協会が出版しているプログラムに沿って、独立して行いたく思っていますので、ヤクーツクの行政および教会関係の幹部に対して、私の著作を推挙していただき、当方の合法的な要求が適うように可能な斡旋をお願いする次第です。
元外科医長　プロコフィ・フィリポフ・ポリャージン
ただいま、サンクトペテルブルグから郡都ヤクーツクへ住まいを移そうとしつつ
1877 年 4 月の 22 日サンクトペテルブルグ市」

[7] ロシア地理学協会東シベリア支部保管員 A.S.タニロフスキーから 1900 年 11 月 27 日付けイルクーツク発信の手紙以下のような内容で地理学協会古文書部（Разряд 64, опись 1, но.35 に添付）に保管されている。ポリャージンの手紙にあるような古文書部の所蔵印はない。

「帝室ロシア地理学協会書記殿
ここに帝室ロシア地理学協会東シベリア支部委員会の指示の下、当支部で拝借しておりましたポリャージンによる手稿本ヤクート語ロシア語辞書につき、拝借の用務が終わりま

(2013)で全文が掲げられている。ポリャージンの辞書が結局出版されなかった経緯については不明であるが、ペカルスキーの辞書において大いに利用されていたことは既に上に述べたように分かっている。

「序」は Мигалкин(2013)において全文に逐次、解説を加える形で、引用されているので、本稿では上記の 2 通の手紙(本稿の脚注参照)に加え、「序」についても和訳のみを掲げる。さらに、「使用の手引き最重要事項 Необходимѣйшія изъясненія къ Употребленію Якутско-русскаго словаря.」については、全文を引用・和訳し、19 世紀後半にヤクーチヤ中央部で使用されていたヤクート語の姿を垣間見る縁として紹介したい。

２．和訳「序」

[8] [　(p.1)]　ヤクート語ロシア語辞書

[1　(p.2)]　（白紙）

[1　(p.3)]　ヤクート語ロシア語辞書
プロコフィイ・フィリポビッチ・ポリャージン　編纂
1877 年 3 月　サンクト・ペテルブルグ

[2 (p.4)]　（白紙）

[2 p.5]　序

ヤクート地方に居住するヤクート人は、その人数からも、またその能力からも本邦の異民族の全てを凌駕する民族であり、ヤクート人の言語は周囲の諸民族の使用する言語として優れて共通している。即ち、ヤクート語を使用する民族は、ツングース、ラムート、ユカギール、チュワン、チュクチ、さらにはロシア人に及ぶ。他の少数民族が自らの言語を自在にまた好んで使用するのよりも、特にロシア人は常にヤクート語で自在に話そうとする 1(注)。

（注１）ヤクート地域およびその周辺の[3　p.6、注エリア]各地で他の全ての諸民族、特にロシア人

したので、謹んで返却申し上げます。当支部運営委員会はご厚意に深く感謝いたします。
敬具　　東シベリア支部保管員　A.S.タニロフスキー

[8] 全編の表紙として、[　(p.1)] Якутско-русскій словарь とあり、中とじの標題ページとして [1　(p.3)] Якутско-русскій словарь.- Составленный Прокофьемъ Филипповымъ Порядинымъ. – Мартъ С.Петербургъ-とある。両ページに登録番号表記 Б. IX . 35.が右上に記入され、[　(p.1)] では更にその右上に帝室地理学協会古文書部の印が押されている。

がヤクート語を広く身につけていることについて、より詳細な記述は以下の人々の記録にある：ニコライ・シューキンが 1844 年にヤクート地方に赴いた折の記録、ドミートリィ・ヒートロフ長司祭、現ヤクーツク及びビリュイスク主教の 1958 年のヤクート語文法の序文がある。その他にもヤクート地方の作家等にも同様の記述がある。

ヤクート語は、ヤクート地域でよく通じる他に、さらに広域、即ち、沿海州付近からイルクーツク県並びにエニセイスク県のいくつかの地域[3 p.6]に至るまで広く通用する。つまり、アムール川左岸域では河口に至るまでにある支流全域でヤクート語を耳にし、そこから東海の西岸域はカムチャッカ半島まで、さらに、コリマ川に至るまでのトナカイ・チュクチの地にいる南西部の人々、また、コリマからエニセイ川河口域に至り、同じくエニセイ川上流のトゥルハンスクに至る地域の北氷洋沿岸住民、即ち、サモエード人、ツングース人、さらにはこれらの人々に出自を持つドルガン人や、アナバルやオレニョクの人々の間でやはりヤクート語が使われている。イルクーツク県キレンスク地区のヤクート人はその言語をレナ川やイルガ川沿岸、更にほぼアンガラ川に至る地元に居住するロシア人農民等とこれらの流域を移動するツングース人等に広めたのである。

特にヤクート地域のロシア人児童は、以後、都市部でも村落でもはじめはヤクート語でしゃべり、後に[3 p.7]一定の年齢に達するとロシア語の片言を話すようになる；郡部でヤクート人の中に暮らすロシア人の多くは、全く自らの言語を知らないこともある。一般の人々のロシア語の読み書きと普及は、ヤクート地方とその周辺の地域の全ての異民族も、またそもそもロシア人達でさえ甚だ低い程度にあり、その原因は、民間であれそれ以外であれ教育施設が不足しているということ、また同様に教育を受けたロシア人があまりいないということに起因している。

このような僻地であることが原因となり、今世紀(19 世紀－訳者注)の 60 年代には、カムチャッカ、アリュート・クリロ、ヤクート地域の最高位大主教であり、現モスクワ府主教であられるインノケンチー師をして、上述の地域の様々な種族間に正教信仰のヤクート語の習得を広め、増やすそのために聖書や祈祷書をヤクート語に翻訳すること、また翻訳のためにこの言語を正しく使用するためのヤクート語文法書[4 p.8]を編むという指示を出すことを余儀なくさせたのである。1850 年にアカデミー会員である研究者ベートリング氏がチュルクモンゴル諸語と比較してヤクート語に関する研究書をドイツ語で著した。しかしながら、これらの資料は上述の諸地域に住まう様々な諸民族にとっても、またヤクート地域のロシア人にしてみてもロシア語上達に資するための手引きとしては全く役に立たなかったと言わざるを得ない。そもそもは正教の教えを広めること、そのためにヤクート語を正しく使用することを目指すものが必要であったのであるから。；実際、言語学的には秀でたベートリング氏のこの著作は、研究の世界でのみ重要な価値をもつものでしかなく、さらにドイツ語で書かれており、そ

のため、ヤクート地域ではこぞって利用が極めて難しく、またこの著作そのものが短いもので、特に語彙の部分が少なく、文字表記の形やその配列が一般的ではないために、見るべきものが全く無いわけではないものの、ヤクート語の読み書きを促進するためにはほとんど役に立たない。

[4 p.9]ヤクーツクに聖書やその他の教会文書の教義を翻訳するために設けられた協会は、したがって今、ヤクート語ロシア語辞書を必要としている。上記の各地でレベルの低い教育施設や私的な学校できちんと教育を受けているとは言えない素人の先生の下で学ぶロシア人やヤクート人の若者達は、ロシア語の読み書きは甚だ簡単に早く習得するのであるが、ロシア語を話すという点については全く出来ないかあるいは、非常に下手であるに留まり、それは、それぞれのコミュニティ内にロシア語を知っている者がおらず、会話の実践練習が出来ないためである。そのため、彼らに最も必要とされているのはヤクート語ロシア語辞書である。ロシアあるいはヤクート語が使われていない所から様々な教会関係あるいは民間の業務で到来する人々や、遠く離れた県からやってくる他市の商人等やその番頭等、この地に到来する人々は皆、ヤクート語ロシア語辞書あるいはロシア語ヤクート語辞書がないため、甚だ辛い思いをしている。-[5 p.10]この必要性に鑑みて、上記の協会が協会員に出したヤクート語ロシア語辞書あるいはロシア語ヤクート語辞書を編纂すべしという提案は今のところ未だ達成されていない。私は、この需要を満たすべくここに実践的簡略ヤクート語ロシア語辞書を編纂した。この辞書は、簡易な記述で分かり易さを旨としているため、研究という点からはその期待に応えられるものではなく、研究者にとっては物足りないものであることは明らかである。この辞書は、手本皆無の状態の著者の初めての新しい試みであった；ベートリング氏の辞書は、上記の理由もあり、また、私がドイツ語を解さないため、全く頼りとすることが出来なかった。

読者諸兄諸姉からのご批正を是非お願いしたいと思っている。また、この私の[5 p.11]ささやかな辞書に褒められるべき点があれば、新聞に取り上げていただきたいと思うし、ヤクート地域のヤクーツク市に住まう著者である私のところまでお知らせいただきたい。なんとなれば、この小さな辞書を出版した後、ロシア語訳をつけたヤクート語の歌、お話などを名文集に付した完全なヤクート語ロシア語辞書とロシア語ヤクート語辞書の編纂に入るつもりであるからである。

著者　プロコフィイ　ポリャージン

1877 年 3 月　日[9]
サンクトペテルブルグにて

[6 p.12]（白紙）

---

[9] 日付欄は、括弧〝　〟のみで、空欄となっている。

３．和訳「使用の手引き最重要事項」

[10] [6 p.13]ヤクート語ロシア語辞書使用の手引き最重要事項

[11]a.　文字並びに記号の表記と発音について

ヤクート語を書くための文字はロシア語アルファベットから借用されており、形や発音に若干の異なりがあるのみである；これらは十分ではないもののヤクート語本来の単語あるいは音連続をある程度正しく表記するため、従来ヤクート語文字考案者等により、24 文字が使用されており、この辞書では Ӧ 及び Ю の上付き記号付きの文字を２つ加えた；つまり、全部で 26 個の文字があり、アルファベットの順と文字は以下の通りである：

А, Б, Г, Д, ДЖ[12], Е, Ё, И, (İ), К, Л, М, Н, О, П, Р, С, Т, У, Х, Ч, Ы, Э, Ӧ, Ю, Ю̃, Я, 及び Ъ, Ь

[7 p.14] [13]これらのうち、

---

[10] [6 p.13]Необходимѣйшія изъясненія къ Употребленію Якутско-русскаго словаря.-

[11] а.) Объ очертаніи и произношеніи буквъ и другихъ знаковъ. –

Буквы составляющія Якутскую грамоту заимствованы изъ русской азбуки, лишь только съ нѣкоторыми измѣненіями, какъ въ формахъ, такъ и въ произношеніяхъ; коихъ хотя не вполнѣ, но для болѣе или менѣе правильнаго произношенія и написанія собственно якутскихъ словъ или соединенія звуковъ были приняты составителями якутской грамоты до 24х буквъ, къ коимъ мною прибавлены два знака надъ буквами Ӧ и Ю̃; значитъ всѣхъ буквъ составилось 26, въ слѣдующемъ порядкѣ алфавита и начертаній:

А, Б, Г, Д, ДЖ, Е, Ё, И, (İ), К, Л, М, Н, О, П, Р, С, Т, У, Х, Ч, Ы, Э, Ӧ, Ю, Ю̃, Я, и Ъ, Ь. –[7 p.14]

[12] ДЖ は、現代ヤクート語表記では ДЬ に相当するとみることができる。

[13] Изъ нихъ:

Гласныя　а, е, ё, и, (i), о, у, ы, э, ӧ, ю, ю̃, я. –

а	произношится	какъ	русское			а. –
е	------	//	------	//	------	е. –
ё	------	//	------	//	------	ё или іою –
и,	------	//	------	//	------	и. –
(i)	------	//	------	//	------	(i) и ставится всегда предъ гласными. –
о,	------	//	------	//	------	о. –
у,	------	//	------	//	------	у. –
ы	------	//	------	//	------	ы. –
э,	------	//	------	//	------	э. –
ӧ	------	//	------	//	------	іё или йё. –
ю,	------	//	------	//	------	ю. –
ю̃,	------	//	------	//	------	іу или какъ французкое ин = ю̃тъ – молоко,

母音は、a, e, ё, и, (i), o, y, ы, э, ӭ, ю, ю̃, я である。

a	発音はロシア語	a	と同様
e	〃	e	〃
ё	〃	ё あるいは io	〃
и,	〃	и	〃
(i)	〃	(i) 常に母音の前に現れる и	〃
o,	〃	o	〃
y,	〃	y	〃
ы	〃	ы	〃
э,	〃	э	〃
ӭ,	〃	iё あるいは йё	〃
ю,	〃	ю	〃
ю̃	〃	iy あるいはフランス語の ин	〃
		ютъ 「ミルク」、юрюгнъ「白い」、ю̃рюмя 「(ミルク等の)泡」、ю̃тю「押し」その他	
я	〃	я	〃

これらの母音の他にヤクート語には次のような二重母音がある:iэ あるいは йэ, ы̆э, ы̆ӭ, ў̆o, ю̆э.

[14]これらについては、短音記号のついているものは弱く[7 p.15]発音されるが、２つの文字が iy が ю に融合するようにはならず、やはり別個に発音され、ま

					ю̃рюгнъ – бѣлый, ю̃рюмя – пенка, ю̃тю – толканіе и пр. –
я	------	//	------	//	------ я. –

Кромѣ сихъ гласныхъ въ якутскомъ языкѣ есть еще и двугласные звуки, какъ-то: iэ или йэ, ы̆э, ы̆ӭ, ў̆o, ю̆э. –

[14] Здѣсь буквы подъ краткими выговариваются – [7 p.15] слабые, и двѣ буквы несливаются въ одну, какъ iy въ ю, но не произносятся также и отдѣльно, а такъ чтобы весьма слабо начавъ одною подкраткимъ, примѣтнѣе или слышнѣе кончить другою, напримѣръ: iӭряхъ или йӭряхъ – ученіе, бйэсъ – пять, онгорўохха – надо дѣлать, бы̆э – веревка, бы̆эръ – печень, тю̆ӭсъ – грудь, тю̆ӭнъ – едно, мокса и т. п., точно также, какъ и на другихъ языкахъ: майоръ или моіоры, бульонъ, районъ и пр.; а слѣдующія ай, ей, ій, ой, уй, ый, юй и пр. выговариваются также, как и въ русскомъ языкѣ. –

ず短音記号のついている方が弱く発音され、続く音がよりハッキリと聞こえが強くなる。例えば、іэряхъ あるいは йэряхъ「レッスン」、「学び」、бйэсъ「５」、онгорўохха「為さねばならない」、бы̆э「引き綱」、бы̆э「肝臓」、тю̆эсъ「胸」、тю̆энъ 「灸、モグサ」等で、他の諸言語と同様である：майоръ или моіоры「少佐」、бульонъ「ブイヨン」、 районъ「地域」、他;一方、ай, ей, ій, ой, уй, ый, юй 等は、ロシア語に見られるのと同じように発音される。

[15]子音：б, г, д, дж, л, л, м, н, п, р, с, т, х, ч

---

[15] Согласныя: б, г, д, дж, л, л, м, н, п, р, с, т, х, ч. –

б, произносится какъ русское б. –

г, ------ // ------ // ------ г при мягкихъ гласныхъ, но пригустыхъ и впереди и сзади согласныхъ больше какъ латинское h, напр.: тангара – Бога, тангасъ – платье, магнайгы – первый, могнубутъ – повѣсился, мугнубутъ – мучу. –

д, ------ // ------ // ------ д. –

дж, ------ // ------ // ------ д и ж, но невполнѣ, а какъ – бы съ удержаніемъ съ – [8 p.16] той и другой по полузвука, напрммѣръ – дженкиръ – прозрачный, дже–домъ, джахтаръ – женщина, джикти – чудный ипр. –

к, ------ // ------ // ------ к.-

л, ------ // ------ // ------ л. –

м, ------ // ------ // ------ м –

н, ------ // ------ // ------ н, но присоединеніи спереди или сзади буквы г слышится по полузвучно, напримѣръ: тэгнъ – ровный, Тангара – Богъ, тагнгъ – наледь, тогнгсогой – пестрая дятель Тигнг – бѣлка, тынгъ – дыханіе, ерянгъ – длинно-клювъ. Въ граматикахъ Протоіерея Хитрова и Г. Бётлинга изъ буквъ н и г изобрѣтена сложная согласная нг, которую я выпустилъ, такъ-каъ г можетъ встрѣчаться и съпереди и съзади н, или даже вмѣстѣ сѣ обѣихъ старонъ, напр.: тагнгъ, тигнгъ, тогнгъ и пр. –

п, ------ // ------ // ------ п. –

р, ------ // ------ // ------ р. –

с, ------ // ------ // ------ с, но между двумя гласными она при произношеніи – [8 p.17] выбрасывается, напримѣръ : басы̄ ба^{s}ы, бисиги – би^{s}иги, бягяся – бягя^{s}я, эся – э^{s}я и слѣдующая за нимъ гласная произносится придыхательнымъ напряжениемъ.–

т, ------ // ------ // ------ т. -

х, ------ // ------ // ------ х. –

ч, ------ // ------ // ------ ч. –

б　発音はロシア語の　б　と同様

г　〃　軟母音の前後ではロシア語の г と同様、低母音の前後及び子音の前後ではラテン文字の h にあたる音により近い。例：тангара 「神」、тангасъ「服」、магнайгы「最初の」могнубутъ「首をつった」、мугнубунъ「苦しめる」

д　発音はロシア語の　д　と同様

дж　〃　д と ж に同じであるが、全く同じではない。この２つを半音ずつ組み合わせたかのような[8 p.16] 感じである, 例えば、дженкиръ 「透き通った」、дже「家」、джахтаръ「女性」、джикти「奇妙な、不思議な」、等。

к　発音はロシア語の　к　と同様

л　〃　л　〃

м　〃　м　〃

н　〃　н、前か後に г がある場合、聞こえは半音となる、例：тэгнъ 「平らな」、Тангара「神」、тагнгъ「上氷」、тогнгсогой「斑なキツツキ」、тигнг「リス」、тынгъ「息」、ерянгъ「長嘴」。ヒートロフ長司祭やベートリング氏の文法では、文字 н と г から複合的な нг を作り出しているが、本稿では採用しなかった。なんとなれば、г は前接することもあれば、後接することもあるからであるし、前接後接が同時に起こることもあるからである、例：тагнгъ, тигнгъ, тогнгъ、他。

п　発音はロシア語の　п　と同様

р　〃　р　〃

с　〃　с、ただし、母音間では、[8 p.17] 発音されない、例：басы　ба^{s}ы, бисиги – би^{s}иги, бягяся – бягя^{s}я, эся – э^{s}я、この場合、後続の母音は帯気音として緊張して発音される。

т　発音はロシア語の　т　と同様

х　〃　х　〃

ч　〃　ч　〃

[16] ъ と ь は、ロシア語とほぼ同様に語末が硬音、軟音であることを示すが、ь は

---

[16] Ъ и ь употребляются почти въ тѣхъ же твердыхъ и мягкихъ окончаніяхъ, какъ и въ русскихъ, но ь весьма рѣдко употребляется, нарп.: альджархай, юльджютъ, альчагаръ, только въ случаяхъ послѣ л и предъ дж и ч. –

極稀にしか使われない、例：альджархай, юльджютъ, альчагаръ, л の後で дж と ч の前で使われる。

[17]上付き記号：

[18]上付き二点（ ¨ ）、上記に挙げているように ё と ӭ に付く。
短音記号（ ˘ ）、母音のいくつかに付き、その場合、母音はロシア語と同様、半母音として発音される。もっぱら、й, ў, ы̆ 及び ю̆ となる。– хаятай?「どちらか？」、онгорўохха 「為さねばならない」、ыиты̆эхха「訊かねばならない」、ю̆рюттю̆эхха「覆う」、他。

チレー、長音記号（¯）は、同じ並びの音で語義が異なる場合、長音記号として[9 p.18]全ての母音に付きうる、例：асъ「髪の毛」に対して āсъ「飢え」; басъ「頭」に対して бāсъ「傷」; билъ「タイメン(魚)」に対して бӣлъ 「腰、胴」; хону「野原」に対して хонӯ「宿泊」; ытабынъ「私は射る」に対して ы̄табынъ「私は放して自由にする」; さらに、同様に単語の中の力点 «アクセント» を表すためにも使われる、例：бēсъ「５」、бӣри「一つ(対格)」、бӣрдяхъ「１年経っている」、бярбя̄кяй「おばあちゃん」、「ладышка (ладушка 好きな女性?—訳者)」。

---

[17] Надстрочные знаки: -

[18] Двоеточія (¨), какъ выше показаны – ставятся надъ ё и ӭ. –

Краткій (˘) ставится надъ нѣкоторыми гласными, тогда онѣ имѣют полугласныя произношенія, какъ русскій й, больше – встрѣчается надъ : й, ў, ы̆ и ю̆ – хаятай? который изъ нихъ, онгорўохха – надо дѣлать, ыиты̆ эхха – слѣдуетъ спросить, ю̆рюттю̆эхха – покрыть и пр.-

Тире или знакъ продолжительный (¯) можетъ ставится [9 p.18] надъ всѣми глаыными, какъ для протяжнаго произношенія, что при однихъ и тѣхъже слогахъ можетъ давать другія значенія словъ, напримѣръ: асъ – волосы на головѣ, а āсъ – голодъ; басъ – голова, а бāсъ – рана; билъ – таймень, а бӣлъ – талье, станъ; хону – поле, а хонӯ – ночевка ; ытабынъ – стрѣляю, а ыытабынъ – увольняю, отпуская,; - такъ и для ударенія % акцента % въ словахъ наприм. : бēсъ – пять, бӣри – одного, бӣрдяхъ – одногодичный, бярбяякяй – бабка, ладышка. –

[19]б., 品詞について

[20] 名詞類の変化形については３つの格の形で示されている：誰が？何が？に答える形となる主格形 киси「人（が)」、масъ「木（が)」; 誰を？何を？に答える形となる第１対格形[21] кисини кютябинъ 「人を（私は）待っている」, масы кардябунъ「薪あるいは木を（私は）伐っている」; 誰と比べて？何と比べて？に答える際に使われる比較格 киситягяръ атъ кюстяхъ「馬は人よりも強い」、мастагаръ тасъ тостуганъ 「ガラスは木よりも壊れやすい」。

[22] 動詞は、直説法現在時制１人称単数形、[9 p.19]不定法の不定体、及び形動詞現在形で掲げる、例：тапт-ыбынъ「私は愛する」、тапт-ы̆эхха 「愛さねばならない」、тапт-атчи 「愛しているところの」; онгор-обун 「私は為す（行う)」、онгор-ўохха 「為さねばならない」、онгор-отчу – 「為しているところの」。

[23] 助詞は変化しないので、名詞類変化や活用と区別するため、次のように略号を付する：нар. – нарѣчіе「副詞」、предл. – предлогъ「前置詞」、союз. – союзъ「接続詞」、междом. – междометіе「間投詞」。

[24]注記：ヤクート語を全く知らない読者は、この辞書を手引きにしつつ、より詳

---

[19] б., О частяхъ рѣчи.-

[20] Склоняемыя части рѣчи показаны въ трехъ падежамъ: имянительномъ, на вопросъ кто? что? киси – человѣкъ, масъ дерево ; винительномъ 1мъ, на ворпосъ кого? что? кисини кютябинъ – человека жду, масы кардябунъ – дрова или дерева рублю; и сравнительном, употребляемомъ при сравненіи съ кѣмъ? или съ чѣмъ? киситягяръ атъ кюстяхъ – конь сильнѣе человѣка, мастагаръ тасъ тостуганъ – стекло хрущѣ дерева.

[21] ここでいう第 1 対格とは、Бётлингк(1851)における定対格 определенный винительный падеж を指している。

[22] Глаголы поставлены въ наклоненіяхъ изъявительномъ, настоящаго времени, [9 p.19] въ единственномъ числѣ перваго лица и неокончательномъ въ неопредѣленномъ видѣ и въ причастей настоящаго времеии, на примѣрах : тапт-ыбынъ – я люблю. тапт-ы̆эхха – должно любить, тапт-атчи – любящій; онгор-обун – я дѣлаю, онгор-ўохха – дожно дѣлать, онгор-отчу – дѣлающій. –

[23] Частицы несклоняется, для отличія отъ склоняемыхъ или спрягаемыхъ частей означены сокращенными названіями, а именно: нар. – нарѣчіе, предл. предлогъ, союз. – союзъ, междом. – междометіе. –

[24] Примѣчаніе : Вовсе незнающіе Якутскаго языка при руководствѣ этимъ словаремъ

しい文法事項に当たらねばならない。即ち、D.ヒートロフ長司祭が 1858 年に著した簡略文法やアカデミー会員のベートリング氏が 1850 年に著した文法からより詳しい文法を参照すべきである ; もっとも、それよりも遙かに望ましいのは、ヤクート語をよく知っている人間との会話で実践的に練習することである。なんとなれば、ヤクート語は未だ甚だ読み書きについては対応が遅れており、[10 p.20]きちんと整っていないからである。したがって、必ずしも文字表記が正しくされていない可能性もある ; 更に他の言語同様に、たとえ文字表記に十分に対応している言語であってさえ、その言語を文字でしか知らない人は実践的な言語使用の指導者がいない場合、決して単語を正しく発音することは出来ないからである。

４．おわりに

1877 年にポリャージンが完成させたヤクート語話者による初めてのヤクート語辞書は、かくして出版されぬまま 1900 年に著者自身がかつて提出した帝室地理学協会の所蔵に戻った。このことは、この貴重な辞書が散逸を免れたというで幸運であったとも言える。この辞書は、Мигалкин(2013)が指摘するように 19 世紀のヤクート語圏の中央部の当時の「標準的な」ヤクート語を記録したもので、北方の諸言語並びにチュルク系諸言語の研究において非常に貴重な資料である。本稿では内容の紹介に進めなかったが、今後、この辞書についての研究や出版事業がサハ・ヤクーチヤ国内外で計画されることになるだろう。

５．参考文献

Бётлингк, О.Н. (1851) *О языке якутов* (*Über die Sprache der Jakuten*), (перевод: В.И. Рассадин), Наука, СО АН СССР (1989)

должны пользоваться болѣе подробностями грамматическими изъ краткой грамматики, составленной Протоіереемъ Д. Хитровымъ въ 1858 году, отъ части и изъ грамматики Академика Г. Бётлинга 1850 г.; а горазда лучше, если имѣть практическое упражненіе въ разговорахъ с человѣкомъ, хорошо знающимъ Якутскій языкъ, такъ какъ Якутскій языкъ весьма плохо еще усовершенствованный и неуспѣвшійся при- [10 p.20] мѣниться къ грамотности, то неможетъ быть правильно выраженъ грамотой; и человѣкъ незнающій языка по одной только грамотѣ неможетъ никогда безъ практическаго руководителя правильно произносить слова, также какъ и навсѣхъ другихъ языкахъ, даже усовершенствованныхъ въ примѣненіи къ грамотѣ. –

Карева, Н.В. (2011) Терминологическое обозначение категории наклонения в «Российской грамматике» М. В. Ломоносова, *Индоевропейское языкознание и классическая филология*, «Институт лингвистических исследований РАН», т.XV, pp.245-251

Мигалкин, А.В. (Migalkin, A.V.)（2013）“Прокопий Порядин и его словарь”, *Илин*, 2013, номер 1-2, стр. 34-48, Якутск

Пекарский, Э.К. (1907-1930, rep.1958), *Словарь якутского языка*, СПб, Петрог., Л.

Попов, Г.В. Слова(1986) *«Неизвестного происхождения» якутского языка (сравнительно-историческое исследование)*, Якутское книжное издательство, Якутск

ЯСИА (2013) «Уникалькый якутско-русский словарь 1877 года, составленный якутом Прокопием Порядиныьм», Пресс-служба Постоянного представительства Республики Саха (Якутия) в Санкт-Петербурге, http://iolonkho.s-vfu.ru/node/1002 (Северо-Восточный федеральный университет им. М.К. Аммосова, Научно-исследоватльский институт олонхо)

藤代節(2007) 「ロシア科学アカデミー東方学研究所サンクトペテルブルグ支所図書室編ヤクート語図書カタログについて」、『中央アジア古文献の言語学的・文献学的研究』、白井聡子・庄垣内正弘(編)、pp.181-260

[Note] From the Yakut-Russian Dictionary compiled by P.F. Porjadin in 1877: "Preface" (Japanese translation) and "Guidance for users on some of the most important points" (text and Japanese translation)

FUJISHIRO, Setsu
setsu@tr.kobe-ccn.ac.jp

Keywords: P.F. Porjadin Yakut-Russian Dictionary Russian Geographical Society

In this paper, we introduce the Yakut-Russian Dictionary (about 7,900 words) compiled by an educated Yakut, P.F. Porjadin in the year 1877. The dictionary remains unpublished and exists only in the state of a hand-written manuscript, which is preserved at the Archive of the Russian Geographical Society. It was found and reported by Professor A.V. Migalkin (North-Eastern Federal University (NEFU), Yakutia) in 2013. The dictionary, at the time, provided Pekarskij's Dictionary (an authoritative Yakut-Russian dictionary with 25,000 entries published during 1907-1930) with a large body of lexicon. Pekarskij referred to Porjadin's unpublished dictionary for about 2,500 entries.

Porjadin's dictionary is invaluable and of high importance both in linguistics and in Siberian studies, for the dictionary is compiled in Yakut language, a language used in the central area of Yakutia during the latter half of 19th century and has been edited by a native Yakut speaker. If the dictionary had been published at the time of its compilation, it would have been the first of its kind in Yakut language. Consequently, in this study, we briefly discuss the appearance or format of the dictionary and infer its "fate" from the two letters, which are attached to the manuscript. One of these letters was written by Porjadin himself. We provide a Japanese translation of the 'Preface' (the text of which is published in Мигалкин (2013)) and also a Japanese translation of the section named 'Guidance for users on some of the most important points' of the dictionary, along with Porjadin's text, for the text of the 'Guidance' has not been published so far. We expect that Porjadin's dictionary will be published and studied in the near future.